「主の祈り」における EPIOUSIOSについての教会史的検討

加藤邦雄

「主の祈り」の中に「日ごとの食物」(口語訳聖書) あるいは「日用の糧」(文語訳聖書および一般の式文) と訳されている ho artos ho epiousios なる語がある。これについて，一般にひろく使用されている代表的な聖書によって，その訳語を二三引用して見たい。それによって，まず，問題を提起するためである。

The Authorized Version によると， Matt. 6 : 11 は次のごとくに訳されている。"Give us this day our daily bread" (underline は筆者の加筆であって，以下同様) となっているが，The Authorized Versionをテキストとした The Westminster Edition においてその本文に次のような脚註が附加されている。"daily bread, or, perhaps, bread for the morrow (1); supply our basic needs from day to day." さらに Luck 11 : 3 の本文が "Give us day by day our daily bread" であるのに対して The Westminster Edition は次のような脚註を附加した。"daily, possibly, for the coming day; in any case, for immediate essential needs." 言うまでもなく， our daily bread と訳された語は， Matt. 6 : 11 においても Luk 11 :3 においても，原語では同一の語である。

註 (1) morrow なる日常には余り用いられない語が何を意味するか，訳者の苦心した所ではあろうが，われわれにとっては必ずしも明確ではない。 morrow なる語を Shorter Oxford Dictionary で引くと大体次のようになっている。"1=morn, morning. 2. The day next after the present, or any specified day. 3. The time immediately following a particular event. 4. (now only poet.) as morrow day, a) the next day. b) day break."

現代ドイツ語私訳聖書として，相当高く評価されている Menge 訳の Die Heilige Schrift によると Matt. 6 : 11 の本文は次のごとくである。„Unser auskömmliches Brot gib uns heute!" これに次のような説明が括弧の中に加えられている。„ Unsern Tagesbedarf an Brot, oder : Brot für der anbrechenden oder heutigen (oder den kommenden = morgenden) Tag ; oder : Brot zum Dasein nötig (oder : nach Bedarf)."

さらに，公平を期するために，最も新しい，しかも学的研究に耐えると思われるフランス語訳，La Sainte Bible——それは L'École Biblique de Jérusalem が1956年に完成した，カトリック学者の手になるものであるが——によると， Matt. 6 : 11 の本文は "Donne-nous aujourd' hui notre pain quotidien" である。pain quotidien は，言うまでもなく，Vulgata の Luk. 11 : 3 の訳語に由来するが，それは，ともかくとして，この新しいカトリク側のすぐれたフランス語訳は，次のような脚註を附加している。"Traduction traditionnelle et probable d'un mot difficile. On a pu proposer aussi : "necessaire à la subsistance" et : "de demain." De toute façon la pensée est qu'il faut demander à Dieu le soutien indispensable de la vie matérirelle, mais rien que cela, non la richesse ni l'opulence. — Les Péres ont appliqué ce texte au pain eucharistique."

以上，僅か三種類の聖書の訳とその脚註とを引用したのみでも，すでに理解されるように，全世界のキリスト者が日ごとに唱えている「主の祈り」の中に，訳語が，したがってその解釈が，容易に一定されない ho artos ho epiousios なる語のあることが判る。このことは，いささかでも，聖書を原典で読んだ人々の間では衆知のことである。そのことは，すでに，紀元二百年前後（185年頃～254年頃）アレクサンドリアにいた，教父 Origenes において，判っていた。すなわち，かれの時代において， epiousios なる語が新約聖書以外に用いられていないことをかれは指摘している。（ただし，このことについて， Origenes の判断が完全に正確であったか否かについて，今日は，いささか，別の見解を多くの聖書学者は採っているのではあるが，そ

のことについては，後に再び，触れたい。）

さきに引用した三種類の聖書とその註とを参照したのみで， ho artos ho epiousios の訳語を分類して見ると，大体，次のようになる（次に述べるもの以外に，いくつもの解釈があるが，それには，ここでは，触れないことにする）。

1. 「日ごとのパン」，あるいは，「毎日のパン」。(1)
2. 「なくてはならぬパン」(2)
3. 「来るべき日のパン」(3)
4. 「聖さんのパン」(4)

なお，以上のごとき，四つの読み方以外にも，いくつかの解釈があるが，それらのことについては，すでに Kittel, Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament Bd. II. SS. 587-595 に記載されているので省略する。

註 (1) 「日ごと」あるいはこれに近い意味に訳する聖書は次のごとくである。
Itala 訳， Vulgata のルカ福音書 11：3（マタイ福音書 6：11は別の訳語である），Beza (quotidianus). Luther (tāglich Brot,) Zürcher-Bibel (tägliches Brot, Hamp-Stenzel-Kürzinger, Die Heilige Schrift, と Riessler-Storr, Die Heilige Schrift とは „Unser täglichen Brot" と訳す。 The Revised Version, The American Standard Version, The New English Bible (our daily bread). Delitsch や Ginsburg などのヒブル語訳 (leḥem ḥᵘqēnu), その他。

(2) 「なくてはならぬパン」あるいは，それに近い意味に訳すものには次のような聖書がある。
Weitzsäcker (Unser nötiges Brot), Stage (Unser Brot, das wir bedürfen). Phillips (the bread we need). 永井直治「われらのパンなくてはならぬもの」 Peshitta 訳（これについては後述する）。Crampon, La Sainte Bible の改訳 "le pain necessaire à notre subsistance" その他。

(3) 「来るべき日のパン」あるいは「朝のパン」などと訳されているものは次のごとくである。
Moffatt (our bread for the morrow), Weymouth（ただしその Marginal note は for the day now coming on)。

(4) 「聖さんのパン」と訳したものは一つもないが，そのように解釈する者がある。たとえば Augustinus は，山上の説教を講解した文章の中で，この個所を Itala と同様に， quotidianus と訳してはいる。すなわち， Vulgata による同じ個所とは相違す

るが，肉体に必要なパンと解すると共に，それを聖さんのパンとも解されると，次のように，述べている。 "Si quis autem etiam de victu corporis necessario, vel de Sacramento Dominici Coporis istam sententiam vult accepere ……." したがって，Vulgata と Augustinus の訳とでは， epiousios の訳し方が相違しているにも拘わらず， Augustinus の時代にすでにこれを聖さんのパンにする解釈がとにかく存在したことは立証される。

かつて，英語でギリシヤ語を学ぶ者が最も多く利用し，今日といえどもその価値を失っていない，Thayor, Greek-English Lexicon of the New Testament には，次ぎのように書かれている。 A word found only in Matt. 6 : 11 and Luk. 11 : 3, in the phrase artos epiousios……. そこで Thayor の Lexicon のみを利用する人にとって， epiousios なる語は， 新約聖書以外のどこにも使用されていないかのように印象づけられたかも知れぬ。さらに，新約聖書ギリシヤ語とかなり深い関連をもっていると一般に理解されている，ギリシヤ訳旧約聖書 (LXX) の中に，幸か不幸か， epiousios なる語は一回も用いられてない。（ただし， epiousios に近いギリシヤ語がこの七十人訳 (LXX) の中にないことはない。それのみならず，Apocrypha（旧約外典）に属するある異本の中には， epiousios なる語が用いられているので新約聖書およびそれからの引用文以外には， epiousios なる語は絶対に用いられてなかった，と断言することはできない。）

今日最も完備されたギリシヤ語辞典の一つとされている Liddell Scott のものによると epiousios なる語は "very rare word in Origen's day" であると書かれている。すなわち， Origen の時代にその語が非常にまれにしか用いられていなかったことを認めるが，それが Origen の時代に，新約聖書とその引用文以外には，全く用いられていなかったとはけっして断言しない。ところが，Thayor のみを利用する人の中には，前述の Thayor の説明から判断して， epiousios なる語は新約聖書の主の祈り以外にはどこにも用いられていないと速断する者があった。通俗的な聖書雑誌などにしばしばそのような説明が大正以来なされた。

Epiousios なる語が，Origenes の時代に一般的にはほとんど使用されていなかったことは，恐らく疑い得ない事実であろう。その例証の一つとして紀元二世紀に書かれたと推定されている，いわゆる「使徒教父たち」Apostolic Fathers の文献を見ても，epiousios なる語は，「使徒の教」Didache と呼ばれる短い文章の中に僅か一個所発見されるのみであって (Did. 8 : 2), しかも，それは「主の祈り」（その原文はマタイ福音書にあるそれとは僅かながら相違するが本質的にはほとんど一致している）からの引用の個所である。(1)

註 (1) Index Patristicus Sive Clavis Patrum Apostolicorum Operum (Goodspeed) P. 87 参照。

しかるに，二十世紀になってから，新約聖書時代のいわゆるコイネー・ギリシヤ語で書かれた民間の資料が発見された。それを Papyrus と称するがその中に，はからずも，epiousios なる語があることが判明した。これについては，Kittel, Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament. Bd. II. SS. 587–595 に，Debrunner, Diberius, Codbury などの文献が紹介されている。ただし，epiousios なる語が，コイネー・ギリシヤ語にすでに使用されていたことは，今日すでに，明白にされたが，その語がどのような意味に用いられていたかについては，なお，十分に明らかにされてはいない。それについて，Creed の The Gospel according to St. Luke によると次のように説明されている，"An unquestionable example of the word in a secular document is found in Preisike, Sammlungbuch griechisch. Urkunden aus Ägypten, i. no, 5224 (cf. Debrunner in Th. Lit. Zeit. 1925, p. 119), but the document is too fragmentary in throw any light at all upon the meaning of the word."

これより先き，Deissmann は，この epiousios なる語が，ギリシヤ訳旧約聖書（七十人訳）の中に収められている Apocrypha（旧約外典）の中の一書「第二マカバイオス書」(Makkabaiōn B) 1 章 8 節の異本にあることを指摘していた。この個所は一般に用いられているテキストでは次のようにな

っている。"prosēnegkamen thesian kai semidalin kai exēpsamen tous luchnous kai proethēkamen tous artous." しかしアルメニア語からギリシヤ語に反訳されたと思われる，この個所のギリシヤ語原典の三種類の異本では，tous artous に tous epiousious なる形容詞が附加されていると言う。(1)

註 (1) Deissmann, Bible Studies P. 214. "In the discussion of this word, so far as we have seen, no attention has been paid to an interesting observation of Grimm–not even by himself in the Clavis. He makes a note to II Macc. 1 : 8 as follows: 'An arbitrary but, on account of Matt. 6 : 11 and Luke 11 : 3, a remarkable amplification in three codd Sergii, viz. tous epiousious."

しかし，Deissmann が指摘するように，この語は，七十人訳にある外典の異本が書かれた頃に確かに用いられていたにしても，この僅か一個所の引用だけでその意味を正確に決定することは実は相当に困難であろう。

The Authorized Version (1611年) による "daily bread" なる訳，および Luther の Die Bibel (1921年) による „Unser täglich Brot" なる語は，いずれもラテン語訳，ことに，Vulgata に由来すると考えられる。Vulgata の福音書は Hieronymus (342頃—420) によって，多分，384年頃にまとめられたと推定されるが，daily や täglich が由来すると考えられている Vulgata の quotidianus なる語は，マタイ福音書 6 : 11 にはなくて，ルカ福音書 11 : 3 にある。マタイ 6 : 11 は，衆知のごとく，supersubstantialis なる語になっている。Hieronymus より少し遅れるが，かれから余り遠くは遅れていない Augustinus (354–430) のマタイ福音書講解によると，かれはその 6 :11 の個所で supersubstantialis を用いないで，quotidianus を用いている。(Migne. vol. I, 34, p. 1280–1281) また，Vulgata より少し早く訳された Itala によると，マタイ 6 :11 は quotidianus となっている。これより，はるか後世になって，宗教改革者 Calvin の弟子 Beza はその私訳 Novum Testumentum の中でマタイ 6 : 11 をやはり quotidianus と訳した。この quotidianus なる語は，恐らく，The Authorized Version の "daily" への

橋渡しになったと考えられる。（そこに，カトリック的聖さん観をあえて斥けて， supersubstantialis とせず quotidianus なる語を採用した理由があったと思われる。）

Vulgata の supersubstantialis なる語は，問題を引き起し得る語であってその解釈は必ずしも明確ではない。第一に，ラテン語そのものの意味を決定することが，必ずしも容易でない。(1) Lewis, Latin Dictionary によると，supersubstantialis なる形容詞は， supersubstantia なる名詞に由来するが，necessary to support life と解されている。Lewis によると，supersubstantivus なる形容詞であれば， supermaterial の意味にもなろうが，かれは supersubstantialis をこれと区別している。

註 (1) The Shorter Oxford Dictionary によると supersubstantial を次のように解釈する。"In allusion to late Latin supersubstantialis in the Vulgate version of Matt. 6 : 11…… above or transcending material substance." また，日本でも，研究社の辞典では，この語を「超物質的の」と訳している。ロマ・カトリク側の教会ラテン語辞典であるところの Sleumer, Kirchen-Lateinisches Wörterbuch によって，この語を引くと次のようになっている。"1l. Überweltlich, über das Wesen (eines Dinges) hinausgehend. 2. Schliefe Übersetzung von epiousios (von epeimi, epienai=heran kommen, anbrechen) für den soeben anbrechenden Tag notwendig oder genügend, daher täglich nötig, täglich; während die Vulgata bei Luc. 11 : 3 den griechischen Ausdruck artos epiousios sinngemäss und richtig mit panis quotidianus wiedergift, verdolmetscht sie den ganz gleichen Ausdruck bei Matt. 6 : 11 sonderfarerweise mit pains supersubstantialis das den Sinn des Urtextes vollständig entstellt."

それで， supersubstantialis なる語が古典ラテン語の意味で用いられて来た意味と，ローマ・カトリック教会がそれ以後教会用語としてそれを用いている時の意味とでは，幾分そのニュウアンスが相違しているように思われる。すなわち，Itala や Augustinus においてマタイ 6:11 のepiousios が単純に quotidianus と訳されているのに対して， Hieronymus が特別に意識して， supersubstantialis を，教会用語として， supermaterial の意味に用いたのか，それとも，単純に necessary to support life の意味に用いたのか，これは，簡単に断定は下されない問題である。しかし，ここでは，

supersubstantialis が supersubstantivus の意味にローマ・カトリック教会で用いられていて，それがしばしば聖さんのパンとも結びつけられて解釈されていることを指摘するに留めたい。

ギリシヤ語新約聖書が一方においてラテン語に訳されていた頃，他方においてそれはシリア語にも訳されていた。説明するまでもなく，イエスとその直弟子たちが日用に用いた言葉は，シリア語の姉妹語とも言うべきアラム語であった。シリア語とアラム語とは，発音はほとんど同じであるが，文字はかなり相違していた。もしも，アラム語で新約聖書ことに福音書が書かれ，しかも，それがそのまま現存しているならば，研究上非常に便利であるが，そのようなものは現存しない。そして，シリア語聖書はギリシヤ語からの訳であるとされている。それ故に，シリア語訳新約聖書の言葉をそのままアラム語に直しても，それがそのままイエスの語った言葉であるとは断定できない。そのような事情を一応考慮に入れつつも，なお，一度は念のためにシリア語訳に当つて見たい。今日最も入手しやすいシリア語訳は Peshitta 訳である。それによると，マタイ 6:11 もルカ 11:3 も同じく lḥama d'sunkanan となっている。 lḥama はヒブル語の leḥem（パン）と同一語源に由来する。 sunkanan は s-n-k なる動向に由来し，終りの n は第一人称複数を示すヒブル語の nu に当る。 d' はギリシヤ語の ho に当ると言えよう。それで sunkanan は our needs あるいは necessities を意味する。（それについては，なお， Paine Smith, A Compendious Syriac Dictionary を参照）そこで， lḥama d'sunkanan を直訳すれば bread for our needs とでもなろう。なお， sunkana なる語は，新約聖書の Peshitta 訳において，コリント一書 12:22（口語訳では「必要」と訳された語に相当する）やヨハネ黙示録 3:17（口語訳では「貧しい」と訳されている語に相当する）にも使用されている。（なお，それについては Jennings, Lexicon to the Syriac New Testament を参照。）

Vulgata のマタイ 6:11にある supersubstantialis を単純に解釈し，Lewis

の Latin Dictionary にあるように necessary to support life とするならば Peshitta 訳と必ずしも矛盾しないことになろう。

シリア語訳新約聖書は大体において東方教会のひろい地域に長い間用いられていたが，同じ東方教会に属していた教父 Chrysostom (347頃–407) が残したマタイ福音書講解6：1以下の部分を見ると，幾分これに関連のないこともない文章を見出す。かれは元来「artos epiousios とは何であるか」と言う問いを自ら出して，これに対しては極めて簡単に Tous ephèmeron（その日のためのもの）と答えを出したが，それに続く講解の文章を英訳で引用して見たい。"For because He had said thus, "Thy will be done in earth as it is in heaven," but was discoursing to men encompassed with flesh, and subject to the necessities of nature, and incapable of the same impassibility with the angels:……for the tyranny of nature permits it not: for it requires necessary food." But mark, I pray thee, how even in things that are bodily, that which is spiritual abounds. For it is neither for riches, nor for delicate living, nor for costly raiment, nor for any other such thing, but for bread only, that He hath commanded us to make our prayer. And for "daily bread," so as not to take thought for the morrow." Because of this He added, "daily bread," that is, bread for one day." (The Nicene and Past–Nicene Fathers. Volume X. p. 135) Chrysostom は最小限度に生活に必要な糧としてこの日一日のパンのために祈れ，と主が命じられたと解釈した。

東方教会ではなく，西方教会に属し，しかも，紀元二世紀から三世紀にかけて北アフリカにいた代表的なラテン教父の一人である Tertullianus (160頃–220頃) の De Oratione（祈禱について）の中に次のような文章がある。"Panem enim peti mandat, quod solum fidelibus necessarium est ; cetera enim nationes requirunt." （なぜならば，パンのために祈り求めよと教えておられるからである。それは信者たちにとって必要な唯一の食物である。なぜならば，異邦人たちはすべてそれ以外のものを求めているからである。）

Tertullianus においてあらわされている思想は，東と西との差はあっても，本質において，Chrysostom のそれと大差はないように見える。

しかし，同じくシリア語訳でありながらも， Peshitta よりも幾分早く書かれた別種のシリア語訳の福音書が Cureton によって発見されたので，それを Peshitta と区別して Curetonian Syriac と呼ぶが，それによると epiousios なるギリシヤ語は amina となっている。それは，シリヤ語でも，アラム語でも，同一であって，continual とか beständig とか訳さるべきものである。それは一見して誰にもわかるごとく， aman（堅くする）なる動詞 amen（たしかに）なる副詞， emeth（確実）なる名詞であらわされるヒブル語とも，同じ語源に属するセム語である。この amina なる語は，Peshitta 訳では，ピリピ書1：3（口語訳では「……たびごとに」と訳された語に相応する），ロマ書 12:12（同じく口語訳では「常に」と訳されている語に相応する）などに用いられている。それは「確実な」とか「絶え間なき」などの意味である。それ故に，ここで問題になっている語を「真実の食物」とか「不朽の食物」とかに解するならば，ヨハネ福音書6：27 にある「朽ちる食物のためではなく，永遠の生命に至る朽ちない食物」と言うような句と，その内容において，よく一致するであろう。 Origenes はその De Oratione で，大体そのような意味に理解している。（Augustinus も，すでに述べたマタイ福音書の講解の中で次のようにも説明している。すなわち，永遠に至る生命のための霊的食物をわれわれは豊かに与えられるので，それと区別して，日々のパンがあるのであると言う。 Augustinus によれば，主の祈りの中にある「日々のパン」はどこまでも，肉体に必要なパンであるが，それはすでに永遠の生命に至るパンがあることを予想しているものであるとして次のように言う。“*De nobis hodie autem dictum est, quamdiu dicitur hodie,* id est, in hoc temporali vita. Sic enim cibo spirituali post hanc vitam saturabimur in aeternum, ut non tunc dicatur quotidianus panis;”）

「ヘブル人たちによる福音書」なる小さい文書がある。その書かれた年代

を正確に決定することは不可能であろうが，あるいは，第二世紀の比較的早い頃に書かれたのかも知れぬ，とある人々によって推定されている。それについて，前に述べた Vulgata 訳の訳者である Hieronymus が次のように述べている。"In evangelio, quod appellatur secundum Hebraeos, pro supersubstantiali pane reperi mahar quod dicitur crastinum, ut sit sensus: panem nostrum crastinum, id est futurum, da nobis hodie." (ヘブル人たちによる福音書と呼ばれているものにおいて， supersubstantialis panis の代りに mahar なるものを私は発見した。それは crastinum を意味する。それで，それはこのような意味になる。われわれの crastinum のパンを毎日われわれにお与え下さいと。) ここで， crastinum と訳された語は， cras なる語から変化したものであって，英訳すれば， on the morrow あるいは for the morrow であろう。あるいは又 the future, here after の意味ともなるであろう。 mahar はシリア語でもあり，アラム語でもある。それは，the after time, future, to-morrow などの意味である。ヒブル語では maḥar であって，これも morgen あるいは der morgende Tag の意味である。その用法については出エジプト記 17：9 や 32：5 などを参照。

Hieronymus の伝える，この「ヘブル人たちによる福音書」の断片にしたがって，この mahar を，もしも，「未来の」あるいは「直ちに来るべき」の意味であると解き得るならば，少くとも，二つの意味が生れてくることになろう。すなわち，第一に，もしもそれを平易に受け取るならば，現在始りつつあるところの「この日」を意味することになる。言葉をかえれば，それは，今日の食物でもあり，明日の食物でもある。しかし，第二に，もしも，これを幾分思想的に受け取ることができるとするならば，未来の日のために必要な食物，すなわち，終末の日に与えられるべき食物のことになるであろう。マタイ福音書 6：31 に「何を食べようか，何を飲もうか……と言って思いわずらうな」とある故に，また，すでに引用したように，ヨハネ福音書 6：27 から判断しても，肉体に必要なパンを与えたまえと，罪のゆるしを乞い求める前に祈ることは筋が通っていないのかも知れぬ。事実，すでに Augu

stinus その他の教父たちがそのことを十分に意識して，そのことに言及したのであった。（今回においても，以上の解釈と大体似たような説を採用する者が相当数あって，前にも引用した Die Zürcher-Bibel の附録にも，次のような説明が附加されている。„Die vierte Bitte des Unservaters lautete nach dem von den „Hebräern" benutzten Evangelium, das uns aus der Zeit um 100 nach Chr, bekannt ist. Gib uns heute unser Brot für morgen. Diese Hebräer redeten Jesu Muttersprache und hatten das Gebet somit in demselben Wortlaut überkommen, in dem es Jesus gesprochen hatte.")

すでにその名を引用した Didache は，恐らく紀元二世紀に書かれたであろうと推定される（ある人々はそれが紀元100年前後に書かれたと推定する）。その中に「主の祈り」が引用されている。Didache の中で「主の祈り」（その原文はマタイ6：9以下のそれとは幾分相違しているが，本質的には同一のものであろう）は，バプテスマについての文章と聖さんについてのそれとの中間に置かれていて，それは一日に三回唱えられねばならぬと規定されている。それ故に，「主の祈り」はすでにキリスト者の日常生活の中に生かされた祈禱文であったことが判る。Didache の最も新しい訳の一つは，The Early Church Fathers なる双書の中に収められているものであろうが，そこでは，この個所の文章が次のように訳されている。Give us to-day our bread for the morrow. このような訳し方については，すでに論じたからここに再び改めて論ずる必要はないが，それにも拘わらず，この「主の祈り」が置かれている文章の context が問題になるかも知れぬ。それは，「主の祈り」の後に収められている聖さんに関する式文である。元来，Didache の中にある聖さんの式文の特長は次のような文章の中によくあらわされている。"*Peri de tou klasmatos. Eucharistoumen soi, Pater hemōn,* hupper tēs zōēs kai gnōseōs, hēs egnorisas hēmin dia lēsou tou paidos sou. Soi hē doxa eis tous aiōnas. Hōsper ēn touto to klasma dieskorp-

ismenon epanō tōn oreōn kai sunachthen egeneto hen, hutō sunachthētō sou hē epklēsia apo tōn peratōn tēs gēs eis tēn sēn basileian." (それから，わられたパンについて，われらの父よ，われらは感謝します。それは，御子イエスを通して知らしめたもうた生命と知識とのためであります。栄光が永遠にありますように，このわられたパンが山々に散らされて，また一つに集められたように，地のはてから御教会が集められて御国になりますように。) Didache において，聖さんのパンは，終末論的に解釈されている。パンと言えば，この時代の教会の人々は聖さんのパンを思い起した。その聖さん式の式文の直前にある「主の祈り」の中にある「パン」が果してこれと全く無関係であっかか否か，容易に断定を下すことはできないにしても，両者の間に全く関係がなかつたとは考えられない。Didacheを礼拝式文およびキリスト者の生活綱領として使用していた教会の人々にとって，「主の祈り」の中の「パン」が単に日常生活において肉体のみに必要なパンであったか否か，さらに研究を要する問題であろう。日常生活に必要なパンであっても，そこには終末論的な背景があったのではないかと想像されよう。

紀元四世紀の後半に多分まとめられたと推定される Constitutiones Apostolorum (使徒憲章とでも訳すべきもの) の中に「主の祈り」が収められている。その材料は，いろいろの点から判断して，直接間接に Didache の礼拝式文に由来すると考えられるが，Constitutiones Apostolorum にある「主の祈り」(7巻24章) の前と後とにある式文の位置は大体において Didache によく類似している。

紀元二世紀の半頃の作ではないかと推定される文書の一つに，Diatessalon がある。それは四つの福音書を並列させた，最も古い Harmony of the Gospels であるが，マタイ 6：11 の部分を The Ante-Nicene Fathers なる双書に収められている英訳から引用したい。それは単に "Give us the food of to-day." である。因みにこれはアラビア語からの英訳である。また，ある人はこの句を "the bread of our day" とも訳している。ここで "food" と

も "bread" とも訳されたのは不思議ではない。ヒブル語においてもパンは lehem であるが，それは同時に food でもある。アラビア語において，パンと食物（しかもそれはしばしば肉であるが）とは同一語である。ここで，われわれはヨハネ福音書 6 :53 などではパンと肉とが同義に用いられていることを思い起す。(Gesenius のヒブル語辞や Elias のアラビア語辞典をここで参照。) Diatessalon の原文が元来何であったかは，しばらく措くとして，epiousios に相当する語は単に「この日の」と訳されていて，「今日も与えたまえ」の「今日も」(sēmeron) に相当する語が保存されていない。あるいは，epiousios と sēmeron とが一つにまとめられたと言ってもよい。（これと同じように訳す例が今日でもなくはない。たとえば，次のごときものがある。Die Vier Evangelien Deutsch von Dr. Heinrich Schmidt-vena では „Gib uns heute unser Brot" と訳されている。）

Epiousios なる形容詞が，どのような語に本来由来したかについて，昔から今日まで，いろいろと検討が加えられて来た。ここで，その語をギリシヤ語文法書の示す法則にしたがって，説明するつもりはない。それよりも，Vulgata その他において，それがとにかく quotidianus とか täghch とか，あるいは daily とか訳されて，今日まで式文でも定訳のごとくにされているにも拘わらず，epiousios がそのまま直接的に quotidianus となるのではなかったことを，指摘したい。それは，長い教会の歴史の中にあって次第に固められて来た，一つの伝統的な言葉であった，と言うことを述べたい。この論文では，この一つの語が，それぞれの時代の，それぞれの相違した地方の教会によって，さまざまに解釈されながら長い年月用いられて来たことの経過を，不完全ながら，幾分明らかにしようと努力したつもりである。結論のない検討に終ったことは残念であるが，この論文を書いた日まで，まだ結論的なものはどこにも出されていないのである。

(1964. 4. 30)